

アメリカのバプテストと讃美歌

金丸英子

はじめに

初期アメリカ・バプテストの間では、ある時期、会衆讃美に対して賛否両論あった。それが今日のように盛んになり、ほとんどの教会において礼拝の不可欠な構成要素になったのは、18世紀に始まった一連の信仰大覚醒 (Great Awakening) と呼ばれるリバイバル運動以後のことである。この運動は、第一次、第二次と二度の大きなうねりがあり、それぞれが第一次信仰大覚醒、第二次信仰大覚醒と呼ばれる。この運動は多くの教派に内部分裂をもたらしたが、バプテストもその例に漏れず、とりわけ礼拝の持ち方や説教スタイルを巡って意見の相違を生じさせた。その結果、リバイバル運動に影響を受けた教会員たちは、在籍する教会を出て、自ら新しく教会を始めた。バプテスト教会には他教派からの多くの転入会が続出した。リバイバル運動の影響を受けて新しく始まったバプテスト教会では、礼拝の形式や会衆讃美が従来とは異なり、毎週の礼拝はいわゆる「大衆伝道集会」型となっていった。説教はこれまでよりも強く悔い改めと信仰決心の応答を求め、礼拝の音楽もそれに沿って選曲され、またそのために新たに作曲されるようになった。このような傾向はその後も受け継がれ、特に南部バプテストにおいては、有効な伝道方法を形成する要素の一つとして近年まで影響力を保った¹。

1 アメリカ・バプテストによるバプテスト史関係の学術誌 *Baptist History and Heritage* は、2010年度の夏・秋号の総主題を「Baptists and Revivalism」とし、6名の研究者が寄稿している。その中の論文の一つが Bill Leonard, 'Salvation and Sawdust: The Rise and Fall of A Baptist Conversion Liturgy' (*Baptist History and Heritage*, Vol. XLVI, 2010) である。Leonard は、その論文で南部バプテストにおけるリバイバリズムの歴史を紹介し、昨今のバプテスト教会に見られる伝道意識の低下を分析して提言を行っている。

本論文は、信仰大覚醒がバプテストの教会音楽に与えた影響を調べることを通して、19世紀末以降著しく膨張した南部バプテストの一側面を探る。

1. アメリカ・バプテストの礼拝音楽への関心：イングランドの遺産

バプテスト教会の会衆讃美を巡る是非は、17世紀のイングランドにまで遡る。同じ時期にアメリカに渡って来たイングランドのバプテストたちは、当然その論争を知っており、本国の場合と同様、会衆讃美に関する見解の相違によって教会の分裂を経験した。このように長い間、各個教会レベルで論じられて来た会衆讃美の是非に対して、公にある方向性を提出したのはアメリカ・バプテスト最古の信仰告白であるフィラデルフィア信仰告白（The Philadelphia Confession, 1742年）である。これはペンシルヴァニア州のフィラデルフィア・バプテスト地方連合が、各個教会が共有している信仰的立場を文章に表し、協力伝道の際の確認事項として年次総会に提案し、採択されたものである。内容的には、イングランドのパティキュラー・バプテストによる第二ロンドン信仰告白（1677年）の1689年版をほぼ踏襲し、それに2つの項目が新たに追加されたものである。そのうちのひとつが、礼拝における会衆讃美についてである。その一部は以下のようにになっている。

わたしたちは信じる。使徒行伝16章25節，エペソ人への手紙5章19節，コロサイ人への手紙3章16節の神の讃美を歌うことは、自然な宗教の一部でも、単に道徳的な義務でもなく、キリストの聖なる儀式であって、聖なる規定の下に置かれており、詩編、讃美歌、霊の歌を歌うことは、キリストの教会に加えられたものである。すべての教会は公の集会において、また同様に個人的信徒もヘブル人への手紙2章12節，ヤコブの手紙5章13節のごとく、彼らの受けた最善の光によって神の讃美歌を歌うべきである²。

2 木村文太郎訳「フィラデルフィア信仰告白 [1742年]」、斉藤剛毅編『資料 バプテストの信仰告白』（ヨルダン社、1980年、209頁）。

この中で「キリストの聖なる儀式」(下線, 筆者)の部分にあたる英語は「a holy Ordinance of Christ」で、バプテスト教会が礼典を指す際に用いる「ordinance」があげられている。恐らく、当時のバプテスト教会が会衆の讃美と礼典を結びつけ、その重要性を認識していたためであろう。フィラデルフィア信仰告白の手本である第二ロンドン信仰告白の第22項「忠実な礼拝と安息日」の(5)に、礼拝では、聖書朗読、説教と並んで、「詩編や、讃美歌や、霊の歌によって互いに教え、訓戒すること、主に向かって心から美しく歌うこと」が礼拝の重要な部分として述べられている。「心から美しく」は、「singing with grace in our hearts to the Lord」で、讃美は礼拝者が神に対する心からの感謝をもって行うべき信仰の行為であり、信仰の喜びと感謝を表すべきものとして理解されていたと考えられる。このような理解は、その第二ロンドン信仰告白の手本となったイングランド長老派のウェストミンスター信仰告白(Westminster Confession of Faith, 1646年)の第21項の(5)の「singing of psalms with grace in the heart」(Col. 3:16, Eph. 5:19, James 5:13)と似ており、同じくイングランド長老派の *Westminster Directory for Public Worship of God* (1645年)においても明らかにされている。詩編を歌うことは「It is the duty of Christians to praise God publickly (ママ), by singing of psalms together in the congregation, and also privately in the family」とされ、讃美歌を詩編歌に限定してはいるものの、讃美そのものを信仰の行為とする理解は、フィラデルフィア信仰告白にも反映されている。当時のイングランド長老派と同様に、カルヴァンの神学に大きく影響を受けていた初期のアメリカ・バプテストでも、会衆讃美が「内容を理解して歌うことと、心に感謝をもって神に向かって歌うこと」として教えられていたことが推測できる³。

3 Westminster Confession of Faithでは、「singing of psalms with grace in the heart」の直前に「in obedience unto God, with understanding, faith, and reverence」が置かれ、*Westminster Directory for Public Worship of God*では、「the chief care must be to sing with understanding, and with grace in the heart, making melody unto the Lord」となっている。フィラデルフィア信仰告白では、「teaching and admonishing one another in psalms, hymns, and spiritual songs, singing with grace in our hearts to the Lord; . . . all parts of religious worship of God, to be performed in obedience to him, with understanding, faith, reverence, and godly fear; moreover, solemn humiliation, . . .」とある。

このような本国の伝統を携えてアメリカに渡ったバプテスト達の多くは、会衆讃美に対する関心が高かった上、それを礼拝の重要な一部として受け入れていた。フィラデルフィア・バプテスト地方連合の1723年の年次総会記録によれば、ある無牧師の教会から「牧師の説教が聞けないので、どのように礼拝を守ればよいか」という問い合わせに対して、「これまでと変わらず主の日には教会に集うこと、聖書から一章を読み、詩編を歌って、神の恵みと慰めが注がれるように祈りなさいと勧めた」ことが記録されている⁴。

アメリカのバプテスト教会が比較的早い段階から礼拝の会衆讃美を肯定的に受け入れるようになった背景には、イングランドにおいて、パティキュラー・バプテストの指導者であり、ロンドン信仰告白の起草者にも名を連ねたベンジャミン・キーチ (Benjamin Keach, 1640-1704) と、その息子イライアス・キーチ (Elias Keach, 1667-1701) の存在を無視することはできない。

ここで、イングランド・バプテストの会衆讃美の是非を巡る論争におけるベンジャミン・キーチの活躍を簡単に紹介しておく。信徒のアイザック・マルロー (Isaac Marlow) は会衆讃美に強く反対し、ベンジャミン・キーチに論争を挑んだ。自らの刊行物 ('The Controversies on Singing Brought to an End', 1696年) で、反対の理由を以下のように表した。まず聖書には、礼拝における会衆讃美について直接教えている箇所は見られない。次に礼拝の讃美は、説教のように、神から特別の賜物を与えられている特定の人物によって為されるべきである。加えて会衆讃美では、男女が一緒に声を出して歌うことであるから、パウロが教えるように、教会で女性が男性と肩を並べて何かを行なうことは、聖書の教えに反しており、その結果神聖な礼拝を汚す。マルローによれば、以上のような反聖書的なことをわれわれの指導者 (キーチ) が教えていると批判した。キーチは自らの出版物 ('The Breach Repair'd in God's Worship', 1670年) で直ちに反論。キーチにとって讃美を歌うことは、聖書も「主の晩餐で会衆による讃美がなされた」と教えているので、信仰者にとっては単に「声を出す」以上の事であり、迫害の中では讃美で慰め

4 A. D. Gillette, ed., *Minutes of the Philadelphia Baptist Association* (American Baptist Publication Society, 1851), 27.

られ、力を与えられて来た、と反論した。つまり、キーチにとって会衆讃美は、教会における信仰の交わりが生み出す信仰告白の行いであった。当時、バプテスト教会では毎週礼拝で主の晩餐が行なわれたが、その際、多くの教会では会衆讃美が歌われ、礼典の大切な一部となっていた。マルローの主張によると、会衆讃美反対派と賛成派が共に主の晩餐に与かることが出来なくなる。キーチは、その方が会衆讃美の是非よりも、より非聖書的であると論じた。キーチは、マルローの主張の中に会衆讃美の是非を超えて、教会の交わりを分断するほどの深刻な結果を生み出す種を宿を見ていた。最後にキーチは、コリント信徒への手紙2 13章11節「終わりに、兄弟たち。完全な者になりなさい。励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいて下さいます」を引用して、マルローに対する批判を終えている。

2. 信仰大覚醒

アメリカのバプテストが、少数派からいわゆるアメリカ・プロテスタント主流教派と呼ばれる長老派、メソジスト派と肩を並べるようになったのは、18世紀中期から19世紀にかけて起った信仰大覚醒というリバイバル運動以降のことである。この運動は、「覚醒」という語が示すように、信仰者の信仰が「目覚める」ことに主眼を置き、個人の強烈な回心体験を重視し、それに基づく誠実で敬虔な信仰生活の必要を訴えた。代表的な指導者は、ジョン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1707-1758) とジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714-1770) である。ホイットフィールドはイングランド人の巡回伝道者で、メソジストを創設したウェスレー兄弟の同僚であり、伝道活動のために1730年代後半から1740年代にかけてたびたびアメリカを訪れた。巡回伝道を行い、北東部ニューイングランド地方の都市を起点に大西洋岸を南に下り、サウスキャロライナ、ジョージアなどの南部の都市で大伝道集会を行った。記録によれば、平均で一度に5,000人、多い時には8,000人の聴衆が集まり、屋内や野外ばかりではなく、ハーバードやイエールなど

の大学でも伝道集会が開かれた。ホイットフィールドは自らの伝道活動を几帳面に日記に記したが、その中に当時の教会の様子を伝える次のような一文がある。

Boston is a large, populous place, and very wealthy. It has the form of religion kept up, but has lost much of its power. I have not heard of any remarkable stir for many years. Ministers and people are obliged to confess, that the love of many is waxed cold. Both seem to be too much conformed to the world⁵.

それによれば、多くの教会において礼拝は辛うじてその形は保っているものの、そこに信仰の喜び、力強さ、信徒同士のあたたかな交わりを感じることがなかったとある。また説教者からは、聴き手の信仰心を鼓舞するような説教を聞いたことがないと書き加えている。ホイットフィールドにとって、そのような説教者は「死んでいる」牧師であり、多くの知識はあっても、それが自らの生き方を変えるほどのキリストとの人格的な出会いに結び付いていないと見た。そのような牧師には強いられた信仰告白 (obliged to confess) があるのみで、自らの信仰体験に基づく自覚的な告白がないため、信仰の喜びもないと考えた。これについては、教会員も同様であった。

他方エドワードズは、アメリカ生まれの長老派教会の牧師であったが、信仰大覚醒の波を受け、ホイットフィールドの言う「自らの生き方を変えるほどのキリストとの出会い」を体験した。これを機にエドワードズの説教はこれまでとは変わり、魂の内に神を求める思いを注ぎ入れた神に対する人間の側の応答を求めるべきであると唱え、自らもその主張を全面に出す説教を行った。その典型は1741年に行われた「怒れる神の手中にある罪人」(Sinners in the Hands of An Angry God) と題される説教で、アメリカ史上、もっともよく知られた説教のひとつに数えられている。長くなるが、信仰大覚醒の説教の空気を知るためにその一部を紹介しておく。

5 George Whitefield, 'Journals, 1740', Richard Bushman, ed., *The Great Awakening* (The University of North Carolina Press, 1970), 31.

諸君らは邪悪な者であり、その邪悪のためにいわば鉛のように重い。そして非常な重力と圧力をもって、地獄に逆落とりに堕ちかねない。もし神が御手を伸ばし給わなければ、諸君らは直ちに地下に沈み、墮落し、底なしの沼に落ち込んでしまう。……神の怒りはしばらくの間、せき止められている大水のようなもので、次第に増水してゆき、出口を求めている。……確かに諸君の悪事に対する審判はまだ執行されていない。神の裁きの大水はせき止められてきた。しかし、その間諸君の罪悪は絶えず増加し、日ごとに神の怒りを増し加えてきたのである。もし神が水門に手をかけ、御手を引かれれば、水門は開き、凄まじい神の怒りの恐ろしい大水が思いも及ばぬ程激しい勢いで押し寄せてきて、全能の力をもって諸君を襲うだろう。……かくして、もし諸君がその魂に神の聖霊の大きな力を受け、これにより心の大変革を経験していないならば、あるいは又再び生まれ変わって新たなものとせられ、罪の中より引き上げられて新しい状態に移され、これまで味わったことのないような光と命の前に立っていないならば、諸君はすべてまだ怒れる神の手の中にある。……キリストから離れている諸君たちはだれも、今この時、目覚めよ。そして来たらんとする神の怒りから逃れよ。全能の神の怒りは、まぎれもなく、この会衆の大部分の頭上にかかっている⁶。

ここには、「今・この時を逃すことなく、罪を悔い改めよ」という凄まじいばかりの信仰の決断が語られている。エドワーズは、「活ける神が、悔い改めのない罪人に対する怒りと裁きを怒りの内に控えているが、それは神の時が来れば、せき止められた大水のように人間を襲い、地獄へと突き落とすので、今すぐに悔い改めよ。悔い改めを一日延ばせば、一日早く滅びが近づく」と説教して、信仰の決断を迫る。このような信仰の決断の求めは、エドワーズ自身の体験でもあった。自らの回心体験を基にして執筆した文書（‘A Treatise Concerning Religious Affections is a famous publication’, 1746）には、

6 エドワーズ、「怒れる神の手中にある罪人」（アメリカ学会訳編、『原典 アメリカ史 第1巻』、第17刷、岩波書店、2006年、303-304頁）

「内面の (inward), 神にある甘美な喜び (sweet delight in God), 黙想 (contemplation), 神の恵みと栄光の主権の甘美な認識 (sweet a sense of the glorious majesty and grace of God)」といった言葉が随所に散りばめられ、ホイットフィールド同様、眠っているような生ぬるい信仰は呼びさまされなければならないこと、生き生きと信仰の喜びが満ちる呼び覚まされた魂と、それに基づく生き方を求めるべきことが勧められている。

エドワーズの説教から滲み出る神に対する恐れ、悔い改めのない信仰者に対する審判、その人間の罪を忍耐する恵みの神に関する教えは、人間の側に罪の告白と救い主への応答を強く求める信仰大覚醒の特長的な主張となった。信仰大覚醒による信仰復興の波は燎原の火のように広がり、教会や個々の信仰者に及んだ。諸教派はその波をもろにかぶり、既述のように、教会内では分裂が起きた。会衆派教会では信仰大覚醒に批判的な「オールドライト」(Old Lights)と賛同する「ニューライト」(New Lights)に分裂した。後者はバプテスト教会に転入し、バプテスト人口の底上げとバプテストの教会数の増加をもたらした。たとえば、1740年を境に、マサチューセッツ州では6教会から30教会、コネチカット州では4教会から12教会、ロードアイランド州では11教会から36教会の増加があった⁷。このような勢いは南部にも及んだ。北部で信仰大覚醒の影響を受けたダニエル・マーシャル (Daniel Marshall, 1706-1784)、シューバル・スターンズ (Shubal Stearns, 1706-1771) は南部に赴き、1755年、ノースカロライナ州サンデークリークで伝道活動を始め、その結果、スターンズ夫婦を含めた8家族16名によってバプテストの群れが生まれた。それが5年後の1760年には、606人にまで膨れ上がった⁸。信仰大覚醒の影響で生まれたバプテストは「セパレート・バプテスト」と呼ばれ、その後のアメリカ・バプテスト、とりわけ南部のバプテストの形成に大きな

7 William W. Sweet, *The Story of Religion in America* (Harper & Brothers, 1950), 149-150.

8 Geo [rge] W. Purefoy, *A history of the Sandy Creek Baptist Association, from Its organization in A.D. 1758, to A. D. 1858*, originally published in 1858, reprinted by Arno Press, 1980, 47.

影響を残すことになる⁹。

このように、信仰大覚醒は目覚めた魂における「靈的な力」にその強調を置いたため、神学教育を軽んじる傾向も生んだ。会衆讃美に関しても、従来の詩編歌のみによるものではなく、活気に満ち、会衆全員が参加して歌える讃美歌が求められるようになった。

3. バプテストへの影響：大衆伝道と讃美歌

バプテストの会衆讃美の発展に主要な影響を及ぼしたリバイバル運動は、19世紀初頭、当時西部開拓地と呼ばれたケンタッキー州に端を発した第二次信仰大覚醒 (Second Great Awakening) であった。この運動からキャンプミーティングと呼ばれる大衆伝道方式が生まれ、それ以降のアメリカ・プロテスタントの大衆伝道のモデルとなった。キャンプミーティングとは、野外の大規模な天幕伝道を指す。参加者のほとんどは、近隣から駆けつけた開拓民であった。広大な開拓地では、教会は点在して存在していたものの、説教者は巡回伝道者かパートタイムであり、ひとつの教会にひとりの牧師が専従しているのは稀であった。開拓民は、農閑期になると数日間にわたって行われる超教派の伝道集会の会場へ「キャンプ」に出かけるのが常であった。キャンプミーティングでは、宗教的要素だけではなく、方々から一度に多くの人間が特定の場所に押し寄せる為、新しい人間関係が生み出され、時には商談さえも行われるという社会的要素もあった。

伝道集会はほぼ昼夜を通して行われ、複数の説教者によって感情の高揚を伴う説教が次々と語られ、会衆一同の讃美が多く行われた。会衆讃美には、あらかじめ集会のために準備をして持ち込まれたものもあったが、多くの場合は、当日の集会の熱気を受けて自然発生的に讃美が始まるため、それに対応する讃美歌が選ばれるということが頻繁に起こった。説教者は、信仰大覚醒の説教スタイルに則り、聴衆に罪の告白と回心を迫り、その場で直ちに聴

9 セパレート・バプテストに関する記述は、William W. Sweet, *Religion on the American Frontier, 1783-1850* (Henry Holt and Company, 1931), 151 頁以降に詳しい。

衆の応答を求めたので、そこで歌われる讃美歌はシンプルな旋律と歌詞、章節の少ないものを何度も繰り返して歌えるものが好まれるようになった。讃美歌のリフレインの発展は、この大衆伝道にその起源を求めることができる。会衆が声をそろえて同じ歌と一緒に歌うことで説教の要点はメロディーに載せられて語られ、リフレインによってそれがエコーのように繰り返され、畳み込まれるように会衆に伝えられる効果を生み出した。説教に応答する聴衆は、このような会衆讃美がなされるなかで信仰の決断に導かれ、講壇に向かって歩み出し、自らの決意を表した。

このようなキャンプミーティングの会衆讃美は、従来のように個人の内側に起こされた信仰の喜びと感謝を表す行為というよりも、牧師の説教によって魂の覚醒を経験したものが、その場でその応答を公に表明する環境、または新たな回心者を生み出す環境を整えるものとして欠くことのできない伝道方法のひとつとされていった。実際、キャンプミーティングで歌われた讃美歌は、多くの場合、世代を超えて親しまれ、口ずさまれてきた旋律が用いられ、楽譜がなくても歌えるメロディーで讃美することができた。そうであるからこそ、歌詞は大切になった。当時の大衆伝道で用いられた代表的な讃美歌の内容は次のようなものである。

我は信ず、救い主を
栄光の内に迫り来て、我らを求め給う
親愛なる愛の救い主よ
世に友は無くとも
しかし、おお、我が救い主は、あなたの救い主でもあられる！
(リフレイン)
あなたのために、わたしは祈る
あなたのために、わたしは祈る
あなたのために、わたしは祈る

祈る、私はあなたのために

主にお会いしたならば、その物語を人々に伝えよ
 私の愛する救い主はあなたたちの救い主でもあると
 そして祈れ、救い主が人々に栄光をもたらすようにと
 祈りは答えられよう、あなたのために¹⁰

キャンプミーティングの讃美歌は、魂の内的経験を語ることを促すと共に、教義を歌で覚えることをも可能にした。そこでは、もはや讃美歌は単なる音楽を越えて、信仰教育のテキストの役割も果たした。讃美歌集もいわゆる「讃美歌の本」を越えて、「信仰教育の本」として出版されるようになった。特にバプテストにとって、「讃美歌集」は聖書の次に信仰を教える書物になった。20世紀の著名なバプテストの神学者アウグストス・ストロング (Augustus Strong, 1836-1921) は、それを次のように述べた。

神よ、讃美歌を感謝します。……讃美歌は心から出るもので、頭からではない。たとえ信条を忘れてしまっても、記憶の中に生き続ける。意識することなしに意志に影響を与え、人間を行いへと駆り立てる¹¹。

10 この和訳は筆者の意識による。讃美歌自体は19世紀アメリカの代表的な大衆伝道者ムーディー (Dwight Moody, 1837-1899) と音楽伝道者アイラ・サンキー (Ira D. Sankey, 1840-1908) によって伝道集会で用いられた。この讃美歌はアメリカ・バプテストの間で伝道集会の会衆讃美の定番となり、サンキーが作曲し、オマーレイ・クロー (S. O'Malley Clough, 1837-1910) が詩をつけた。原文は以下の通りである。

I have a Savior, He's pleading in glory,
 A dear, loving Saviour, though earth friends be few ;
 And now He is watching in tenderness o'er me,
 But, oh, that my Saviour were your Saviour too!
 For you I am praying,
 For you I am praying,
 For you I am praying,
 When He has found you, tell other the story,
 That my loving Saviour is your Saviour too ;
 Then pray that your Saviour may bring them to glory,
 And prayer will be answered--'twas answered for you!

11 William H. Brackney, *A Genetic History of Baptist Thought* (Mercer University Press, 2004), 64.

キャンプミーティングの会衆讃美のスタイルは、その後、第三次信仰大覚醒とも呼ばれる20世紀の都市における大衆伝道でも採用された。状況と対象は西部開拓地のそれとは異なりはするものの、大衆伝道という共通項で結ばれたその説教や会衆讃美の特徴においても大きく変わるところはなかった。キャンプミーティングに代表される信仰大覚醒はそもそも、大衆伝道でこそ、その真価を発揮するものであるが、その精神性と様式は個々の教会レベルでまで受け継がれた。すなわち、信仰大覚醒の説教や会衆讃美の特徴がそのまま、日常の教会の礼拝や音楽にも影を落としたのである。礼拝説教は信仰者は応答を求め、未だ信仰に入っていない人たちに、エドワーズばりの信仰の決断を促し、バプテスマと教会への転入会が勧められた。

信仰大覚醒に代表される大衆伝道は、魂の新生体験にその主眼を置いたため、そのクライマックスは説教者による「招き」であった。会衆讃美もそれにあわせて作られるものが多くなってきた。その代表的な讃美歌は「いさおなき我を」である。作曲者ウィリアム・ブラッドベリー (William Bradbury, 1816-1878) はバプテスト教会の音楽スタッフであった。この讃美歌は長い間、ビリー・グラハムを始め多くのバプテストの大衆伝道者によって用いられ、招きの讃美歌として愛されてきたが、そこでは救いを求める人間の応答とともに、救いへのプロセスも同時に歌われ、教えられた¹²。アメリカ・バプテストによる讃美歌に「招きの讃美歌」というジャンルに類するものが極めて多くなっていったのは、このようなキャンプミーティングの精神性をうけつぐことをもって、教会の伝道のあり方を求めたからであろう。

たしかに、バプテスト教会は信仰大覚醒から礼拝における「招き」を学び、20世紀の初めまでにはそれが広く受け入れられ、採用されるようになっていた。ここには、その昔、17世紀のイングランド・バプテストが、誤解と誹謗中傷のなかに信仰告白に立って、祈りあい、励ましあい、相互に牧会しあい、かつ自らの信仰を外に向かって声をあわせて宣言したい「少数派としてのバ

12 教団讃美歌 271 番による歌詞では以下のとおりである。十字架のイエスが清めて招かれるので (1 番)、罪人の自分はイエスに近づき (2 番)、疑い、恐れもイエスが取り去り (3 番)、心の痛手と悩みもイエスが癒し (4 番)、そのイエスに頼る身は救いと命を受け (5 番) このようにイエスは我らを愛し、憐れむ (6 番)

バプテスト」の姿は後退しているように見える。むしろ、アメリカ国内において長老派やメソジスト派と凌ぎを削るまでになり、プロテスタント主流派、多数派としての自己理解と自負をもって、未だ福音が届けられていない前線 (frontier) へ果敢に働きを推し進めるいわゆる「伝道的」な教会としての一面が見て取れるように思われる。そして19世紀から20世紀にかけてとりわけ南部のバプテストにとってはそれが伝道であった。

4. 結 語

バプテストの歴史を見ると、讃美歌や会衆讃美の役割や性質が変遷してきたように思われる。初期アメリカ・バプテストでは、必ずしも一枚岩ではなかったものの、イングランド・バプテストの伝統に則って、聖書朗読、説教、礼典と並んで会衆讃美が大切にされた。また、教理を教える信仰教育の場をも提供し、教会員同士の励ましや忠告、証の分かち合いといった相互牧会の働きにもなった。その在り方は、フィラデルフィア信仰告白の手本となった第二ロンドン信仰告白で述べられているように、「詩編や、讃美歌や、霊の歌によって互いに教え、訓戒すること、主に向かって心から美しく歌うこと」であり、神に対する感謝と喜びを携えて行う、優れて信仰の行為として理解された。

時代が下り、大衆伝道の時代に入ると個々人の内面における神の恵みの直接体験が強調され、説教では罪の悔い改めと信仰の決心が語られ、教会員として教会に連なることを迫る、いわゆる「伝道説教」が多くなり、それを補完する形で讃美歌が用いられ、またそのために新しいタイプの讃美歌が多く作られるようになった。教会における伝道の捉え方が、説教や礼拝音楽に直接反映されたということであろう。

このように、バプテスト教会における礼拝の課題、讃美歌の課題は、教会に集う個々人の信仰の内実と共に、教会がよって立つ信仰の内実とも深く結び付いていると言える。16世紀のプロテスタント宗教改革者たちが苦闘して取り組んだ問い、すなわち「教会とは何か、救いとは何か、福音とは何か」

という問いが、私たちの教会の礼拝、音楽、会衆讃美の理解はもとより、その歌詞や歌い方という具体的な事柄にまで関係しているということであろう。時々耳にする「讃美で一つになる」という語られ方も、先ずもって、そして本質的に、「信仰の告白において一つに結ばれている」という信仰の事実と、その内容の吟味が根底になければならないと考える。